

現代の「シャイネス」のイメージ調査

稲垣(藤井) 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²鹿児島大学 ³流通経済大学 ⁴筑波大学

岸本 (1988) は、シャイネスに相当すると思われる日本語やシャイネスのイメージ、シャイネス経験の有無などを調査し、シャイネスは「内気 (さ)」、「恥ずかしがり (屋)」などと訳されることが多いこと、調査対象者の90%以上がシャイネスの経験があること、40%以上の調査対象者がシャイネスを肯定的に評価していることを明らかにした。本研究は、岸本の研究から20年以上が経過した近年における「シャイネス」のイメージについて検討した。その結果、シャイネスに相当する日本語は先行研究と同様のものが挙げられたこと、シャイネスという言葉に対し、調査対象者の29.3%にあたる参加者が好意的なイメージを持っていたこと、シャイネス経験があると答えた調査対象者は全体の81.5%であったことが明らかになった。

キーワード：シャイネス、イメージ、自由記述

1. 問題と目的

「シャイネス (shyness)」もしくは「シャイ (shy)」という言葉を見た際に、どのようなイメージが思い浮かぶだろうか。岸本 (1988) は、シャイネスという言葉がどのような意味やイメージを持つかについて、大学生 (男性 102 名、女性 197 名) を対象に調査を行った。その結果、シャイネスは「内気・内気な・内気さ (対象者のうち 42.5%)」、「恥ずかしがり屋 (の)・恥ずかしがり屋さん (28.3%)」、「てれ (屋)・てれること・てれくさがり・てれくさい (20.0%)」などと記述されていた。また、分析対象者のうち 90.6%が、シャイネスを経験したことがあると回答していた (Figure1 左)。加えて、岸本はシャイネスが自身にとって肯定的あるいは否定的な意味のいずれかを持つかについても調査し、40.5%が肯定的評価を持っていたことを明らかにしている (Figure1 右)。西洋の社会においては、自身がシャイであると表明することは否定的な評価に繋がるとされるが (Asendorpf, Banse, & Mücke, 2002)、日本では岸本が報告しているように、40%以上の大学生が肯定的な評価をしており、シャイネスに対するイメージには文化間で差がある可能性がある。

岸本 (1988) の研究から20年以上が経過しているが、シャイネスを扱った研究は今日でも国内外において続けられている (e.g., 相川・藤井, 2011; Asendorpf et al., 2002; 藤井・相川, 2013; 藤井・澤海・相川, 2015)。近年において、シャイネスという言葉はどのようなイメージを抱かれているのだろうか。本研究では、岸本にならって同様の調査を行い、近年におけるシャイネスのイメージと、シャイネスがどの程度肯定的、もしくは否定的に評価されているのかについて、自由記述を中心に検討する。

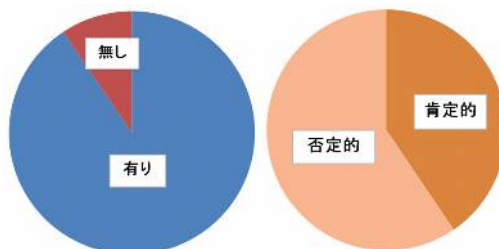


Figure1 岸本 (1988) の参加者のシャイネス経験者の割合 (右) およびシャイネスに対する肯定的・否定的評価の割合 (左)

2. 方法

2.1 参加者 栃木県内の大学に通う大学生 94 名 (男性 79 名, 女性 15 名。平均年齢 18.81 歳, $SD=1.05$) を対象として実施した。

2.2 材料 岸本 (1988) にならい作成した質問紙を使用した。まず, シャイネス (shyness; 形容詞は shy: シャイ) を日本語に直すと, どのような言葉が適切だと思うか, できるだけ多く書くよう指示した。続いて「シャイネス」が, 自身にとって, 肯定的もしくは否定的な意味を持つものかを問う項目を記載した。最後に, シャイネスの経験の有無を尋ね, もし経験があれば「どのような時, どのような場面で, どのような経験をしたのか」を具体的に書くよう教示した。

2.2 手続き 2012 年 4 月に講義の一部を使用し, 回答は任意であり, 個人が特定されないよう教示した上で一斉に実施した。参加者が回答に要した時間は 10 分程度であった。

3. 結果

3.1 分析対象者の確定 94 名の回答者のうち, シャイネスの意味が分からなかったと回答した 2 名を分析から除外し, 最終的に 92 名を対象に以下の分析を行った。なお, 岸本 (1988) は, シャイネス経験のない者も分析から除いているが, シャイネス経験のない者も, 3.2 節で述べるシャイネスに相当する日本語は他の対象者と同様の回答がなされていたため, 本研究では分析に含めることにした。

3.2 シャイネスに相当する日本語 シャイネスあるいはシャイに相当する日本語として 216 の反応が得られ, 1 名あたりの平均反応数は 2.35 個であった。反応が多かったものは, 順に「恥ずかしがり・恥ずかしがり屋 (36.6%)」, 「内気な・内気さ・内気 (8.8%)」, 「人見知り (8.3%)」, 「てれ屋・てれ (6.5%)」などが挙げられた。5%に満たなかった反応に「緊張」, 「消極的」, 「引っ込み思案」, 「臆病」, 「はにかむ」などがあつた。

3.3 シャイネス経験の有無 有効回答者 92 名のうち, 75 名 (81.5%) の回答者が, これまでにシャイネスの経験があると回答していた (Figure2 左)。

3.4 シャイネスの好ましさ評定 有効回答者 92 名のうち, 27 名 (29.3%) の回答者が, シャイネスを肯定的にとらえていた (Figure2 右)。

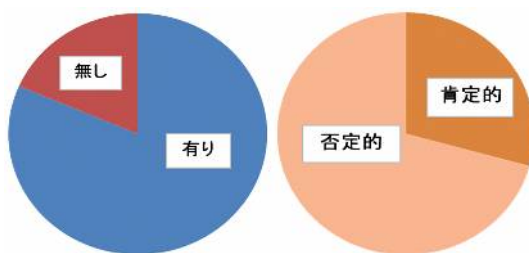


Figure2 本研究の参加者のシャイネス経験者の割合 (左)
およびシャイネスに対する肯定的・否定的評価の割合 (右)

3.5 シャイネス経験の内容 シャイネス経験が「ある」と回答した者の記述を確認すると, 多くの回答者が「初対面での会話がうまく交わせなかった」, 「授業など, 人前で話す際に緊張してうまく話せなかった」, 「クラス会で同性とばかり話してしまい, 異性と話せなかった」, 「知らない人が含まれるグループで遊びに行くことに誘われたが, 断ってしまった」など, 対人場面に関する経験を記述していた。また, そうした際に「顔が赤く, 熱くなる。言葉につまる」, 「手に汗がにじんだり, 心拍数が上がった」といった自覚症状を経験したと報告する参加者もみられた。加えて, 「試合の大会で, プレッシャーを感

じて普段の力が発揮できなかつた」など、一定のパフォーマンスが求められる場面で満足のいく行動ができなかつた、といった回答がみられたほか、「静かな場面でお腹が鳴り、かなり響いたので恥ずかしかつた」というように、自身に注目が集まる（と感じる）場面を挙げた回答もみられた。

4. 考察

4.1 シャイネスに相当する日本語 1 名あたりの平均反応数は岸本 (1988) の 2.41 個と近似しており、その様相も岸本 (1988) と近かつた。ただし「内気な」という反応が少なく、「恥ずかしがり屋」という反応が多かつた点は岸本の調査とはやや異なる点である。

4.2 シャイネスの好ましさ評定 シャイネスを肯定的にとらえていた参加者は 3 割に満たず、岸本 (1988) の調査 (40.5%) よりも 1 割ほど少なかつた。このことは、本邦におけるシャイネスのイメージが以前よりも否定的になっている可能性を示している。

4.3 シャイネス経験の有無および内容 シャイネスの経験があると回答した参加者は、岸本 (1988) の調査 (90.6%) よりも 1 割ほど少なかつた。経験があると回答した者は、対人場面においてうまく振る舞えなかつた、もしくは積極的な行動を避けてしまった、といった回答が多かつた。この点はシャイネスの「社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群である (相川, 1991)」という定義をよく表していると思われる。また、お腹が鳴ったことを恥ずかしく感じるなど、自己への注目を過剰に見積もっている可能性も考えられる。

本研究では、岸本 (1988) と比して、シャイネスを肯定的にとらえる者が少なかつたが、サンプル数は決して多くなく、対象者も一大学の学生に限られていることは課題として挙げられる。学生と会社員、退職後の人など、人によって経験される日常場面は多様であると考えられるため、今後は大学生に限定せず、男女の偏りをなくした上で、幅広い年齢層から回答を集める必要があると思われる。また、岸本と同様、シャイネスの定義を示さずに評定を求めていたため、個々人が想像するシャイネスの範囲が異なっていた可能性もある。今後はシャイネスの定義を示した上で、好ましさ評定を求めた方がよいかもしれない。

また、シャイネスに対する肯定的・否定的なイメージがどのように形成されるかという点について検討することも興味深いと思われる。たとえば、シャイネスという言葉がどういったイメージに近いのか、形容詞を用いた SD 法による評定などを行い、それらの対応分析などを行うことで、シャイネスのイメージを異なる角度から検討できるかもしれない。

5. 参考文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62: 149–155
- 相川 充・藤井 勉 (2011). 潜在連合テスト (IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82: 41–48
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83: 380–393
- 藤井 勉・相川 充 (2013). シャイネスの二重分離モデルの検証——IAT を用いて—— 心理学研究, 84: 529–535
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて—— 感情心理学研究, 22: 128–134
- 岸本陽一 (1988). シャイネス (shyness) に関する予備調査 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 803